

【学会報告】

# 日本死の臨床研究会第34回年次大会

—— テーマ「地域で看取る」——

(岩手県盛岡市文化ホール・マリオス大ホール, 2010年11月6日(土), 7日(日))

宮 坂 万喜弘\*

今年の年次大会会場は盛岡であった。会員数2409名年次総会出席者1950名

少子高齢化を迎えた日本の時代状況がますます高齢者の増大に拍車をかけていく中で、老人の最後をどのように社会が支えてゆくのかが問われている。これからさらに高齢化が進むと多死の時代を迎える。誰もが迎える死に対して我が国社会はどのように対応して行けばよいのか。今年の大会は個人にとっても地域社会にとっても避けられないこの課題にどう対応して行くかを掲げ論ずる大会であった。

## 会議の概要

### 第一日目

第35回大会は大会長の開会の挨拶のあと、例年のごとく、基調講演としての「地域で看取る」と銘打った講演から始まった。

戦後日本が目指したものとは効率のよい経済成長へのわき目も振らぬ追求であった。その結果社会は高度に発展し物質文明の成果を手にすることを実現した。しかしそのため忘れられた大切なものがあつたのではないか。それはわが国の中に伝承されてきた文化つまり「自然な死の受け止め方」の忘却であった。病院や医療により隔離された死を、これからは「その地域に伝えられてきた看取りの死の叡智」に戻すこと以外にないということ

が現状である。

死をどう受け止めるかに示される地域的叡智の中に、人類の文化の歩みは示されてきた。しかし我が国では、この叡智も戦後の経済効率化一辺倒であった核家族化社会への激変と、病院と医療による隔離されたシステム社会の中で、病や死の問題が急速に日常生活の中から失われ、今や人々は身内の死に対してすら、その対処方法を失い、能力を退化させてしまっている。世界的な社会変動の中では、これまでの在り方を変えてゆくしかない。すなわち“死”を病院の外に戻すしかない。

優秀な医療関係者ほど宗教性が脱落していく。一般人(普通の人々)の心の姿が素直に受け止められないような医療者の在り方は疑問である。地域的霊性(伝統)を受け継いだ本人、家族による安心できる支えの環境を取り戻してゆく努力が必要な時期にきた。看護・介護のノウハウを身につけたスタッフの増員もさらに必要である。また死を看取る医療介護(看取り看護文化)を日常の身近な肌で感じ、見える世の中に送り届ける地域社会を巻き込んでの文化運動が必要である。

講演者の岡部建氏は東北出身、東北大学医学部卒業と同時に大学病院勤務ののち、平成9年から仲間の医師8名、看護師30名と共に盛岡県の地域内に4つの在宅ホスピス拠点を設け24時間介護の「地域で看取る」活動を展開してきた人であった。

学生時代山が好きであった講演者は何度も日本アルプスに行ったのだったという。そのころのこ

2010年11月27日受付

\* 江戸川大学 マス・コミュニケーション学科教授

とがふとある時、心に蘇ることになった。山並の稜線をたどる自分の右は今のぼってくる太陽の明るさによって、すそ野まで見渡せる輝く世界であった。しかし左側の谷はいまだ物憂い薄暗がりの闇の中に静まり返った深い谷である。その時自分のこれまで歩んでいた日々の日常生活の世界が、一面だけの明るい世界の中にあるのみの活動であったのではと思われるようになった。最近人々は死を迎えるのには病院でこそ本当だと思う気持ちの人が多し。自分ががんになって初めてこの稜線の尾根の上で両側を見渡せる細い道をたどっているのだと思うようになった。

思えば日の昇ってくる側面の明るい山登りのための世界での道標はたくさんある。しかし左側の暗い死の世界への道標は一本もない。薄暗い側の道標（下り坂の道標）整備をどうするのか。これが準備されてきていないことは、死を前にする患者には本当につらいことではないか。このための道標となる宗教性（各人の心の問題）こそ重要なものではないか。かつては日本人の心に皆持っていたものであった。田中氏が盛岡から離れた田舎で診療していて良かったと思われることは、老人の心にふれ、そこにまだ日本の伝統的な生活の中で息づいていた宗教性が残っていたことである。まだ道標を残していた人がいた。そのような人と出会えたことであったという。

伝統や習慣が生活の中に溶け込んでいる中で、生活に影響を及ぼすことの自然な心の在り方こそが必要なことと思う。今後は民族の生活のたどった中の文化の大切さにめざめ、やすらかな人々の地域での交流を通じて死生学の実践が必要なのである。このための文科系の学者の参加がぜひとも必要であろうと語っていた。

岡田氏自身が現在人生の峠を越え、がんになっていることを認めての講演であった。その語る内容は聴衆の心に重く響くものであった。

次は地域で看取ると題して岩手県内の4つの地域で4つの施設からの高齢者を看取る活動にかかわる実際の状況について（ホームホスピス、在宅ホスピス、小規模多機能施設での看取り、地域病院が行っている在宅療養）その現状報告の実践例

が発表されるかシンポジウムが行われた。地域の人々の現状に対する様々な視点からのケア対応の努力と実践の姿が浮き上がるものであった。

次に午後からの総会の前に、金城学院大学長の柏木哲夫氏の「人生の実力」と題名での講演が行われた。その長い医師活動の中で人生の実力とは何かということをもさまざまな体験を通じてきた柏木氏。氏はこれまでにおよそ2500人以上の患者を看取ってきたという。多くの人生の実力者の姿がそうした中であったというのだが、特に次の人のことが今回の話題であった。ある63歳の男性は、客観的に見て幸せからほど遠い人生を懸命に生きてきた人であった。両親との若い時の死別、結婚生活の苦悩と苦勞、仕事で同僚に裏切られ、次々不幸に見舞われ、つらい思いをしてきた人であった。この人物がなくなる一週間ほど前の回診の折、「入院の時の痛みはすっかりとれました。ここにきて本当によかった。ありがとうございました。私の人生には本当にいろいろありましたが・・・」と語ったのちその終わりに、「幸せな人生でした」と言って亡くなっていったことを思い出すのだという。この人と出会ったことが、柏木氏の「人生の実力者」の定義を変えたという。「人生の道において自分に不都合が生じたとき、その中で人間の生きている証を見ることのできる力、感謝を見出すことのできる力を持った人」である。どれほど辛い悲しい状況にあっても、その只中で健康が支えられ、悲しみにたえ、それに対処できる体力あることは感謝なことであり、この感謝の心こそ「人生の実力の重要な要素なのだ。順風満帆のときは人の底力は見えにくい。」つらく悲しく逆境の苦境に立たされた時にこそ、どのような態度でその状況に対処できるかでその人の「人生の実力」が決まる。人生の達人はその実力を持っている人である。日々の生活の中で少しずつその実力を磨いていきたいものであるとの講演であった。

次は浅田次郎氏の「近代史のなかの命」という題の講演が行われ世界歴史の中での社会的大激変と明治期日本の国の大転換期の若ものたちの活躍

など歴史の裏の状況を説明しながらの命についての見方を浅田学に基づいて披露するものであった。

午後5時半から懇親会が行われた。参加者は昨年同様1300人、当地の出し物の民謡とさんさ踊りが会場で披露されて賑やかな会場をさらに盛り上げた。

## 第二日目

講演者北海道医療大学大学院の教授石垣靖子氏の「ケアすること、はぐくむこと—死にゆく人の傍らにいて—」の公演から始まった。終末期の患者の傍らにいてを許されたものとして看護者は最後の道行をたどる患者の道をともに辿る時間を共有し、患者がこれまで辿ってきた人生と折り合い、また今置かれている状況の整理をし、最後の自己実現のプロセスを患者がたどる伴路者としての任務をはたすのである。ケアの意味はホスピスケアに携わるスタッフがその介護の実践ケアを通じて人間としての本質を学びつつ成長すると思われる。患者と歩む実践の大切さを語る実践からの講演であった。

それから特別企画対談として国際交流委員会共催による悲嘆ケア（グリーフ・ケア）の講演者と

して2001年の9・11テロで夫を亡くしたマーフィー昌子氏がアメリカから参加し、突然の犠牲者となった夫のあの日の出来事と悲しかった心の痛み、残された幼い子供2人を懸命に育てる日々、当時考えた死のうとした心の絶望、自己喪失の悲嘆の心情、その他の怒りや苦悩など、大きな試練を経て今やっと人々の前に出て苦悩を語る講演をするのである。この体験を傾聴した。あの時の3000人の犠牲者の家族は互いに苦悩を分かち合い、語るなかで助け合うこと、を通じて癒されていくのだったという。勇気をもって生きようとするまでにどれほど苦悩に打ちのめされた時間の経過があったことか、心の叫びが伝わってくる公演だった。

会場には事例検討16題目、一般演題（ポスター発表も）247題目、が発表され、同時並行的に会場の展示室や講演会場にて演じられた。今年も熱情のほとばしる実践現場からの戦場のような厳しさと懸命に活動を続ける会員の熱意の伝わる有意義な大会であった。

来年の第35回年次大会「いのちの支え—生と死、その苦悩と癒し—」は、2011年10月9日と10日、会場は千葉県の幕張メッセ国際会議場であることが発表されて閉幕となった。